

深夜の電話

小酒井不木

青空文庫

第一回

一

木の茂れば、風当たりの強くなるのは当然のことですが、風当たりが強くなればそれだけ、木にとつては心配が多くなるわけです。

少年科学探偵塚つかはらとしお原俊夫君の名がいよいよ高くなるにつれて、俊夫君をねた妬んだり、俊夫君を恐れたりする者が増え、近頃では、ほとんど毎日といってよいくらい、脅迫状が舞い込んだり脅迫の電話がかかってきたりします。

たとえば俊夫君がある事件の解決を依頼されると、解決されては困る立場の者から、脅迫状を送つて俊夫君に手を引かせようとしています。あるいは俊夫君がある事件を解決して多額の報酬を貰うと、それを羨うらやんで、金員を分与せよなどという虫のいい要求を致してきます。

俊夫君は、それらの脅迫状や脅迫電話を少しも気にはしておりませんが、俊夫君の護衛

の任に当たる私は気が気ではありません。皆さんは多分、私が「塵埃ほこりは語る」という題目の下に記述した事件を記憶していただくでしょうが、あの事件があつて以来、私はできるだけ注意して、俊夫君と一刻も離れないように警戒しているのであります。

まったく、こんなに心配が増しては、有名になるのも考え問題ですが、それかといつてどうにも致し方がありません。ことに、解決を望む人々が事件の解決を見て喜ぶ有様に接するたびごとに、私は、俊夫君がいかなる場合にも成功するよう祈つてやまないのです。

これから、私が皆さんにお伝えしようとする話も、いわば俊夫君の名声の高いのが基となつて起こつた奇怪な事件です。世の中にはずいぶん物好きな人間もあります、この事件に出てくる人物のような人間に出会つたことは初めてです。いや、こんな前置きに時間を費やすよりも、早く事件の本筋に入りましょう。

それは年の暮れも差し迫つた十二月下旬のことです。諸官庁や諸会社のボーナスが行き渡つて、盗賊とうぞくたちが市中や郊外を横行しようとする時分のある夜、ふと私は電話のベルに眼をさしました。見ると、隣のベッドで寝ている俊夫君が、すでに起きようとしておりましたので、

「まあ、寝ていたまえ、僕が出るから」

と言いますと、俊夫君は、

「それじゃ、一緒に行こう。こんな時分にかかってくる電話は、どうせ僕に用があるに違いないから」

で、二人は、寝衣ねまきの上に外套がいとうを羽織はねおって事務室に行きました。かねて私は、こういう場合の準備として、寝室に卓上電話を設けて、寝ていながら話せるようにしてはどうかと、俊夫君に勧めるのでしたが、俊夫君は、

「僕に用事のある人はみな重大な立場にいるのだから、寝ていて話すべきではない」

と言つて聞き入れません。私はいささか寒さに身震いしながら、受話器を取りあげました。

「もしもし、あなたが俊夫さんですか」

と言つたのは、たしかに男の声です。

「いいえ、僕は大野というものです。俊夫君の代理です」

「では恐縮ですが、俊夫さんに出てもらってください。重大事件ですから」

ここでちよつと申しあげておきたいのは、私たちのところにある電話は、受話器が二つ

に別れていて、聞くだけは二人で聞けるように装置してあります。俊夫君は、先方のこの言葉を聞くなり、直ちに私と代わって、

「僕、俊夫です。あなたはどなたですか？」

「ああ、俊夫さんですか。たいへんです。今、こちらに人殺しがあつたのです」

「何？ 人殺しが？ 誰が、どこで殺されたのです？」

「殺されたのは東京じゅうの人が誰でも知っている有名な人です」

「誰ですか？」

「誰だかあててごらんなさい」

この言葉を聞くなり、俊夫君は私と顔を見合わせました。重大な殺人事件を報告するに、「当ててごらんなさい」とは、たしかにこちらを侮辱した言い方です。俊夫君はしばらくのあいだ返事することを躊躇ちゆうちよしました。と、突然、

「あはははは」

と、先方の男は笑いだして、

「俊夫君、いかに君でも、こればかりは分かるまい」

がらりと変わった言葉の調子に、俊夫君はむっとしました。

「何？ 君は僕を侮辱するのか」

「まあまあ、そんなに怒るなよ。君を有名にしてやろうと思って、わざわざこの夜中に電話をかけたのだよ。この事件を解決するなら、君は、日本は愚か、世界一の探偵になれるぜ。しっかりしてくれよ。いいか」

「君は誰だ？」

「俺か、俺は、君たちのいわゆる犯人なんだ。東京じゅうの人が誰でも知っている、その有名な人を殺した犯人だよ。分かったかい。だから、この俺を捕まえれば、君は世界一の名探偵になれるということだ。だが、おそらく、君の腕じゃ俺を捕まえることはむずかしいかろう」

「何？」

「まあ、そのように憤慨するなよ。もう四五時間のうちに、君のところへ、その殺人事件の報告が行くよ。そうしたら、この俺を一生懸命に捜しにかかるんだよ。分かったかい、しっかりやれよ。じゃ、さようなら」

こう言つて、先方の男は電話を切つてしまいました。

二

俊夫君は、このからかい半分の電話をも、真面目に解釈して、すぐさま、中央局に電話をかけ、今の電話がどこからかかってきたかを尋ねました。するとそれは、「小石川、八八二九」だと分かりましたので、すぐさま、その番号を呼びだしました。

が、どうしても通じませんでした。

そこで、今度は、その番号の持ち主が誰であるかをしらべました。すると、それは小石川区春日町二丁目の「近藤つね」という美容術師であることが分かりました。

「とにかく、根気よく呼びだしてみよう」

こう言つて俊夫君は、約五分おきに呼びだしました。そうしておよそ二時間を経た午前三時十分頃、やっと、こちらの呼びだしに応じました。電話口へ出たのは女です。

「もしもし近藤さんですか」

と、俊夫君は言いました。

「今から二時間ほど前に、あなたの方から、こちらへ電話がかかりましたが、あなたのごころに何か事件がありましたか」

こう言つてさらに俊夫君は、こちらの住所姓名などを詳しく語り、先刻そちらから、男の人がこれこれという電話をかけたが本当であるかどうかを尋ねました。

すると、先方の女の返答は意外でした。その返答の要点はこうなのです。

電話口へ出た女は近藤つねその人であるが、今晚一時少し前に、覆面の盗賊が裏口の戸をこじあけて入つてきたので、女弟子とともに悲鳴をあげて逃げだそうとすると、盗賊のために、二人とも苦もなく振ねじふせられて、麻酔剤を嗅かがされ、そのまま人事不省じんじふせいに陥つたが、やつと今、電話のベルで眼がさめたところだといふのでした。

「もし、こちらから、あなたの方へ電話をかけた男があるとすると、その盗賊でなかったかと思ひます。こちらには、人殺しも何もございません。女弟子は、まだ、麻酔剤のために、すうすう眠つております」

言う声が多少苦しうだったので、俊夫君は、もし何か紛失したものがあれば、警察へ届け出るよう注意して、電話を切りました。

「兄さん、もう寝ようよ」

とつぜん、俊夫君がこう叫びました。

「こういう時は、考えていたとて無駄だ。それよりも事件の発展するのを待とうよ」

「では、君は事件が発展すると思うのか。あるいは単なる悪戯いたずらではないだろうか」

「人殺し云々は嘘かもしれぬが、近藤という家うちへ覆面の盗賊の入ったのは事実らしい。それを取り調べるだけでも面白いのだ」

こう言つて、俊夫君はさつさとベッドの中へもぐり込みました。そうしてすぐ寝入りしました。しかし私は、なかなか寝つかれませんでした。

果たして東京中の人が誰でも知っている有名な人が殺されたのであろうか。もしそうとすると、それは誰であろうか。また、何のために犯人は電話をかけてよこしたのであろうか。などと色々のことを先から先へ考えてゆくと、眼は冴さえるばかりでした。

そのうち、うとうととしたかと思うと、来訪者を告げるベルの音に、はッとして私は飛び起きました。俊夫君も同じく飛び起きました。もう夜はすっかりあけておりました。

来訪者というのは、俊夫君が、「Pのおじさん」と呼ぶ、警視庁の小田刑事でした。私たちは思わず顔を見合わせました。

「Pのおじさん！」

と俊夫君は、小田刑事が席に着くなり言いました。

「小石川区春日町の殺人事件で来てくださったでしょう？」

「え？ どうして君は知っている？ では、君の方へも通知があったか？」

と、小田刑事は驚いて言いました。

「別に通知というほどのことではないのですが、ちよつと、変なことがありました。それはあとでお話ししますから、まず、用件を聞かせてください」

小田刑事は語りました。

「ゆうべ、僕は宿直だったが、二時頃に電話がかかって、春日町一丁目の空家に人が殺されているから、すぐ出張してくれというのだよ。そのまま先方は電話を切ってしまったので、たとい悪戯いたずらであるとしても、捨ててはおけぬので、二人の部下をつれて、行ってみると果たして空家があり、中へ入ると、やっぱり本当だったよ」

「殺されたのは誰です？」

「殺されたのは、T劇場の女優川上糸子さ」

「ええッ、川上糸子が？」

俊夫君の驚いたのも無理はありません。川上糸子はかつて高価な首飾りを盗まれて、俊夫君に捜索を依頼し、俊夫君は犯人を明るみへ出すことなしに、首飾りだけを取りかえしてやったからであります。川上糸子の名は東京じゅうの人は誰でも知っております。だか

ら、電話をかけた男が、そう言ったのは当然のことです。

小田さんはうなずきながら続けました。

「ざつと調べたところによると、川上糸子はどうやら毒殺されたものらしい。そうして多分、他所よそで殺されて、空家の中へ運ばれたものらしい。が、それよりも、奇怪なことは、仰向けに横たわった胸の上に一枚の名刺が置いてあったことだよ。

その名刺に印刷された名を僕は知らぬが、ただその名刺の上の右の隅に『進呈』という文字が書かれた左の上の隅に何と君、『塚原俊夫君』と書かれてあるではないか」

私たちはまたもや顔を見合わせました。

「つまり、川上糸子の死骸を君に進呈するという意味なのだ。そこで僕は、少なくとも、この事件は君に多少の關係を持つているだろうと考えて、電話で総監の許可を得て一切の捜査を君に依頼することにした。君もそれには異議はないだろう」

俊夫君は嬉しそうにうなずきました。

「どうも有り難うございました。全力をつくしてやります。で、その名刺をお持ちでしたら見せてください」

こう言つて俊夫君はふるえる手を差ししました。

第二回

一

小田刑事はポケットの中に手をさしこんで一枚の紙片を取りだし、俊夫君に向かって言いました。

「これが、女優川上糸子の死骸の上に、俊夫君に進呈と書いてあった名刺だよ」

こう言つて、小田刑事はその紙片を裏がえして見ましたが、たちまち、

「おやッ！」

と叫びました。それもそのはずです。名刺の裏も表も真っ白で、何にも書いてはなかったからです。

「おかしいぞ！」

言いながら、小田刑事は、さらにポケットの中に手を入れてしきりに捜しましたが、求めるものはありませんでした。

「Pのおじさん」

と、俊夫君は叫びました。

「やっぱり、それが死骸の上にあつた名刺だったのでしよう。ちよつと見せてください」
こう言つて、俊夫君は、その名刺様の白紙を受け取りました。

「これは隠顕インキで書いたものに違いありません。あなたがご覧になった時は、たしかに文字が書かれていて、それが一定の時間を経て消えたのです。ちよつと待つていてください」

呆氣にとられた小田刑事を残して、俊夫君は、その紙片をもつて次の部屋へ行き、何やらしきりにやつておりましたが、やがて出てきて、小田刑事に渡した紙片の上には、「頭蓋骨」の絵が、赤い色の線で書かれてありました。

「今、ある薬品をかけてあぶりだしたら、こんな絵があらわれたのです。これについて何か心当たりがありませんか」

俊夫君が、こう言い終わらないうちに、小田刑事の顔色は変わりました。

「やっぱり、あいつらの仕業か」

と、小田刑事は吐きだすように言いました。

「え？」

と、俊夫君は、小田刑事の顔を、つよく見つめました。

「実はねえ、俊夫君」

と、小田刑事はいくぶん声をひくめました。

「まだ世間にはむろん知られていないが、この十日ばかり前に、シャンハイ上海に根城をもっているある誘拐団が東京へ入りこんだ形跡があるから、注意しろという内報が、警視庁へきたのだよ。その団体のマークがこの赤い線で書いた頭蓋骨で、彼らは内地の女を誘拐しては、不思議な方法でシャンハイ上海へ連れてゆくのだ。

その団体は主として内地の人間から成りたっているらしいが、支那人などを手先に使い、のみならず、思いもよらぬところに連絡をつけて、実にたくみに犯罪を行っているらしい。この名刺が、川上糸子の死骸の上に置いてあったのを見ると、彼女はおそらく誘拐されるのを拒んで、そのために殺されたのかもしれない。いや、何にしても、えらい事件が起こったものだ」

俊夫君はじつと、その話を聞いておりましたが、何思ったかとつぜん尋ねました。

「川上糸子の死骸は今どこにありますか」

「君に現場を見せるつもりで、春日町一丁目の空家にそのまま置いてあるよ」

「誰か番をしておりますか」

「部下の刑事が二人番をしている」

「あなたが役所に引きあげられたのは何時頃でしたか」

「四時頃だったと思う」

「それから今まで、ずっと刑事さんたちが番をしているのですね？」

「そうだ」

「そりゃ、愚図愚図しておれません」

「なぜ？」

それには答えないで俊夫君は私に向かつて言いました。

「兄さん、すぐ自動車を呼んでくれ。そうして出かける準備をしてくれ」

私は電話をかけてタクシーを呼びました。それから私たちは、例のごとく出発の用意を
しました。

ほどなく自動車がきましたので、三人はそれに乗って、早朝の街を走り過ぎました。寒
い風が街頭の木々を揺すっておりますけれども、私は緊張のために、むしろ身体からだの熱する

のを覚えしました。

誘拐団は何のために帝都一流の女優を殺したのであろうか。何のためにわざわざ警視庁へ電話をかけて知らせ、なお俊夫君にあのようなかからかいの電話をかけたのであろうか。

これらの疑問を解こうと考えにかかると、頭の中もすこぶる熱してきました。が到底それは、私にはもちろん、俊夫君にとつてもまだ解けない謎に違いありません。

俊夫君は小田さんに尋ねました。

「さつき、川上糸子は毒殺されたものらしいとおっしゃいましたが、たしかに毒殺の形跡がありましたか」

「ざつと調べたばかりだから分からぬが、別に血は流れていないし、また絞殺された様子もないから、毒殺だろうと思つたのさ」

「あの名刺には、僕の名と進呈という文字の他に、名刺の持ち主の名が書いてあつたようにおっしゃいましたが、それを覚えておいでになりますか」

「さあ、それがさつきから、どうも思い出せないのだ。たしかに今まで聞いたことのない名で、はじめの一字は『山』だつたと思う」

「山本信義のぶよしというのではありませんか」

「あツ、そうだ。きつとそうだった。君はその男を知っているのか」

「知っているどころか、実は先^{せん}達^{だつ}て川上系子が首飾りを盗まれたとき、僕は探偵を依頼されて、山本が持っていることを知り、山本の手から首飾りを取りかえたのですよ。事はいわば内^{ない}済^{さい}になりましたが、そのために山本は職を失いました」

「すると、そのことをうらみに思つて、その山本というのが、川上系子を殺し、死骸を君に進呈すると書いたのだろうか」

「さあ、それはどうだかまだ分かりません」

「さつき君は、僕の尋ねる前に、すでに春日町で人殺しのあつたことを知っていたようだが、それはどうして分かつたのか」

「ああ、そうでしたねえ。それを話す約束でしたねえ」

そこで俊夫君は、深夜に男の声でからかいの電話のかかつたこと、その電話は春日町二丁目の「近藤つね」という美容術師の家^{うち}からあつたこと、美容術師は、一人の女弟子とともに住んでいるが、覆面の盗賊に入られて麻酔剤を嗅^かがされ、人事^{じんじ}不省^{ふせい}に陥^おつたから、たぶん盗賊が電話をかけたのであろうということなどを順序正しく述べました。

「その電話をかけた男の声が、いま君の話した山本ではなかつたかね？」

「さあ、山本の声をよく覚えていないし、それに電話の声は普通の声と変わるものだからはつきりしたことは分かりません」

こう言つて俊夫君は考えこみました。

二

間もなく自動車は、目的地たる春日町一丁目の空家の前に止まりました。それは街から少し引き込んだところで、建ててからまだ一年はたつまいと思われる平家ひらやでありました。

小田刑事が先に立ち、私たちはそれに続いて屋内に入りました。雨戸がたつた一枚あけてあるだけでしたから、中は薄暗かつたけれど、でも何が起こっているかは、じゅうぶん分かりました。

そこにはまったく意外な光景ありさまがあらわれていたのであります。

小田刑事が、死骸の番に残しておいた二人の刑事が、ともに猿さる轡ぐつわをはめられ、柱にしばりつけられていたのでして、私たちの予期した川上糸子の死骸は、そのあたりに見えなかつたのであります。

小田刑事は、思わず「あッ」と叫んで、二人のそばにかけより、二人の縄を解き、さるぐ猿轡つわをはずしました。

「僕が想像したとおりだ。兄さん、川上糸子が果たして殺されたかどうかも疑わしいよ」
俊夫君は、私をふりかえつてこう言いました。

自由になった二人の刑事は、申し訳がないというような顔つきをして立ちあがりました。
「どうしたというんだ。君たちは。いったい死骸はどうなった？」

と、小田刑事は尋ねました。

二人の刑事が代わる代わる語るところによると、小田刑事が二人を残して、空家を出てからおよそ十分ほど過ぎると、いきなり覆面の二人の男があらわれて、背後からそれぞれ刑事たちを襲い、何か異様なにおいを嗅がされたかと思うと、そのまま気を失い、正気がついて見ると、二人とも柱にしばられ、猿轡をはめられていたばかりでなく、女優の死骸がどこかへ運び去られたというのであります。

「どんな風采の人間だったか分からぬかね？」

と、小田刑事は、怒っても仕様がなと思ったのか、比較的やさしい声で、そのうちの一人に尋ねました。

「顔を包んで、黒い装束しょうぞくをしておりましたから、さっぱり分かりませんでした」

俊夫君は、畳のあげられてある板の上を熱心に搜索しはじめましたが、別に手掛かりになるものは落ちておりませんでした。

「Pのおじさん。川上糸子はどんな服装をしておりましたか」

「洋装で、毛皮の外がい套とうを着ていたよ」

「川上糸子だというたしかな証拠がありましたか」

「そりゃ、もう一目ですぐ分かった」

他の二人の刑事も、彼らの前に横たわっていたのは、たしかに川上糸子に違いないと言葉を添えた。

「それではこのお二人に、川上糸子の昨夜ゆうべからの行動を探ってもらってくださいませんか」
小田刑事は、二人の刑事に意を含めて立ちさらせました。

「俊夫君、一体この事件をどう思う？」

やがて私たち三人になると、小田刑事は、こう尋ねました。

「どう思うって、まだ何とも分かりませんよ。事によると、川上糸子は、本当に死んだのではなく、仮死に陥っただけかもしれない。しかし、それは僕の想像にすぎません」

「これから君は、どういう風に捜索の歩をすすめてゆくのか」

「まず、美容術師の近藤つね方を訪ねようと思います」

「その間に、犯人たちは高飛びしやしないだろうか」

「大丈夫です。もし川上糸子が本当に死んでいたら、死骸を捨てて逃げないとも限りませんが、仮死に陥ったものとする、正気に復するのを待つて連れて逃げるでしょうし、逃げるにはなるべく目立たぬ工夫をするでしょうから、けっしてその方の手配りを急ぐ必要はありません。それよりも美容術師を訪ねた方がきつと効果があると思います」

こう言つて俊夫君は、私たち二人を促し、春日町二丁目に向かつて進みました。

第三回

一

春日町一丁目の空家を出た三人——小田刑事と俊夫君と私——は、間もなく、二丁目の美容術師近藤つね方を訪ねました。

「近藤美容院」とガラスに金文字を浮かせたドアを開けて私たちを出迎えたのは、主人の近藤つね女史でありました。さすがに美容術師であるだけに、非常に美しい容貌で、まだ三十歳になるかならぬのように見えました。ただ、その頬に血の気の失せているのは昨夜の事件のためであると想像されました。

俊夫君が簡単に来意をつけると、女史はすぐ私たちを、綺麗な待合室へ案内してくれました。

それから、私たちは、あついお茶の御馳走になりました。俊夫君が午前三時十分頃に電話をかけたときに、まだ麻酔剤のために人事不省じんじふせいだった女弟子も、もうこの時には普通の人になって、お菓子などを運んで出ました。けれども私たちは、もとよりゆっくり腰を落ちつけているわけにはゆきません。で、俊夫君はすぐさま用件にかかって、ゆうべ盗賊の入った顛末を尋ねました。

近藤女史と女弟子とが交々こもごも語ったところは、電話で俊夫君が聞いたこと以上にこれという注意すべき点もありませんでした。何しろ恐ろしさが先に立って、しかもすぐ麻酔剤を嗅がされたために、盗賊が一人だったか二人だったかさえ記憶しないということでした。いわんや盗賊は覆面していたので、その人相などはさっぱり分からなかったのです。

「何か盗まれませんませんでしたか」

と、俊夫君は尋ねました。

「いいえ、別に何も盗まれはしなかったようでございます。あなたからお電話をいただいたので、方々を検べましたが、何も失っておりません。それどころか、盗賊は小さなガラス罎を落としてゆきました」

「え？ ガラス罎？」

と、俊夫君は熱心に聞きかえました。

近藤女史は女弟子に告げて、それを取りにやりました。やがて女弟子は一個の小さな緑色ガラスの罎をもつてきて、俊夫君に渡しました。

俊夫君は、その罎をすかして見ました。中には一滴か二滴の液体が残っているだけでした。それから俊夫君は罎の表面に貼つてあるレットルの文字を見ました。それは印刷したレットルではなくて、西洋紙片に黒インキで、

Gelsemium

と書かれてありました。すると、それを見た俊夫君の顔には、例の満足の微笑がただよいました。

「これは、たしかに盗賊が落としていったのですか」

「はあ、うちでは色々の化粧水や薬品を使いますから、はじめは、うちの罫かと思いましたが、よく調べてみると違っておりませう。多分、私たちのどちらかが抵抗したとき、覆面の曲者が落としたものと見えます。ちようど、私たちの枕もとに転がっておりました」

この時、小田刑事は待ちかねたように、俊夫君に向かって尋ねました。

「その横文字は何という意味かね？」

「これですか、これはゲルセミウムという毒物です。ゲルセミウムという植物の根にある一種のアルカロイドで、アルコールによく溶けます。ストリヒニンと同じく、非常に苦い味を持っていて、薬剤としては神経痛などに用いられますが、それよりもこの毒は一種の不思議な作用を持っているのです」

「不思議な作用とは？」

「僕は自分で経験したことはないですが、アメリカに、有名なワルトン・ドワイト事件というのがある、その事件の中心となったのがこのゲルセミウムです。」

ドワイトという男が、自分の生命保険金を詐取する目的で、この毒をのみ、死んだように見せかけて、医師をあざむき、死亡診断書をとって保険金を貰い、自分は後に生きかえ

つて、その金で栄華な暮らしをしたということ。それはアメリカの南北戦争がすんで間もない時のことですが、犯罪史上ではかなり有名な事件です」

「すると、そのゲルセミウムは人間を仮死の状態に陥らしめるのだね？」

「そうです。知覚神経にも運動神経にも強く作用しますから、これを飲みすぎれば死んでしまいますが、適量の分量をのめば、一見死んだように思われて、その実、後に生きかえることができるのです」

「ふむ」

と小田刑事は考えこみました。

「そうすると、あの川上糸子の死体も、殺されたように見せかけただけだろうか」

「さあ、僕は実際に見なかつたから何とも言えないのですが、斬きられたのでもなければ、絞殺されたのでもなく、しかも死体が紛失したのですから、先刻も、川上糸子が仮死に陥ったのではないかしらと申しあげたのです。ところがこのゲルセミウムの罫を見て、どうやら、僕の推定が確実になつたような気がします」

先刻から二人の会話を熱心に聞いていた近藤女史は、このとき急に眼を輝かせて尋ねました。

「お話し中を失礼ですけれど、川上糸子さんがどうかありませんでしたのですか」

小田刑事は答えました。

「実は、川上糸子がこの先の二丁目の空家で殺されていたのです」

「ええっ！」

と、女史は、思わず大声を出しました。

「川上糸子とおっしゃるのは、あの女優の川上さんのことでしょうか？」

「そうです」

「それは何かの間違いではありませんか」

「今このゲルセミウムの罎びんが発見されたので、あるいは殺されたのではないかもしれませんが」

「いいえ、それを言うのではありません。殺されたにしろ、殺されたのではないにしろ、そ

の女は、川上糸子さんではなく、もしや人違いではありませんか」

「それはたしかに川上糸子でした」

「でも、川上さんは、いま、伊豆山いずさんの温泉にみえるはずです」

これを聞いた俊夫君は、とつぜん口を出しました。

「え？ それは本当ですか」

「もとより確かなことは言えないですけど、実は昨日、川上さんから絵ハガキが来たのでございます。それに、年内は帰京しないと書いてありました」

こう言いながら、近藤女史は立ちあがって奥へ行き、間もなく一枚の絵はがきを手にして入ってきました。俊夫君は、それを受け取って検しらべました。

「なるほど、一昨日出した手紙ですねえ。それにこれはたしかに川上糸子の筆跡です。川上糸子とあなたとはお近づきなのですか」

「はあ、川上さんは一週間に一度か二度は必ず美容術を受けに見えます。近頃は銀座あたりに二三美容院ができましたけれど、あちらは知った人によく会うので、うるさいと言つて、こちらへお見えになりました」

「最後に川上糸子がこちらを訪ねたのはいつでしたか」

「伊豆山へ行かれる前日でしたから、今から十日ほど前です」

「伊豆山からハガキが度々きましたか」

「いいえ、それ一本きりです」

俊夫君はしばらくじつと考えてから言葉を続けました。

「この頃中、誰か川上糸子のことを聞きにきた者はありませんか」

すると、近藤女史は大きくうなず頷きました。

「そうおっしゃれば、四五日前に、川上さんと同じ年輩ぐらいの人が、美容術を受けに来て、川上さんのことを色々尋ねておりました。でも一体に女の人は他人のことを聞きたがりますから、その時は、別に怪しいとも何とも思っておりませんでした」

「どんなことを尋ねましたか」

「どんなこととって、はつきり思い出せませんが、根掘り葉掘り色々なことを聞きま
した」

「その女はどんな風をしていましたか」

「わたしはやつぱり女優か何かでないかと思いました」

俊夫君は立ちあがりました。

「Pのおじさん、こうなつては、何より先に、川上糸子が、伊豆山いずさんにいるかないかを確かめなければなりません」

こう言つて絵ハガキを見て、
「伊豆山の相州屋そうしゅうやですね。これから僕たちは警視庁へお供しますから、相州屋へ長距離電話をかけてください」

三

近藤美容院の電話を借りて、私がタクシーを招くと、ほどなくやってきましたので、私たちは近藤女史とその女弟子に別れを告げて、警視庁に急ぎました。

目的地に着くと、私たちは、先刻春日町の空家で柱に縛りつけられていた刑事の一人に出迎えられました。

「どうだった、川上糸子の家うちを訪ねたかね？」

と、小田さんは尋ねました。

「はあ、訪ねました。ところが、川上糸子は十日ほど前から伊豆山へ行つて留守だと留守番の婆やが申しました」

私たちは思わず顔を見合わせました。

「それでは、あとで話をゆっくり聞くとして、これからすぐ伊豆山の相州屋へ電話をかけて、川上糸子がいるかどうか、もし出立しゅったつしたとすると、いつ相州屋を出たか聞いてくれたまえ」

刑事が奥の方へ去ると、私たちは小田さんの部屋に案内されました。私たちは、椅子に腰かけて、はじめてゆったりした気持ちになりました。警視庁は、普通の人にとっては、気の落ちつかぬところかもしれないませんが、私たちは度々ここへ来て、まるで自分の家のような気がしているので、早朝からの気づかれを休めることができました。

電話の知らせを待つ間、俊夫君はPのおじさんと、今後の捜索の方針などについて語りあっていました。私は眼を閉じて、今回の事件について考えてみました。

が、考えれば考えるほど分からなくなりました。川上糸子の死体が奪われるし、その死体は本当の死体ではなく仮死の状態にすぎなかったであろうというのだし、しかも当の川上糸子は伊豆山いずさんへ行っているはずだし、何のことやら、いっこう分からなくなりました。

無論、川上糸子は伊豆山から帰ったのであろうが、そもそもこの事件の中心なるものが、どこにあるのかさっぱり見当が付きませんでした。

ところが、事件はさらにいつそう分からなくなつたのであります。というのは、伊豆山

へ電話をかけにいった刑事が、およそ二十分ほど過ぎて帰ってきて、小田さんに次のように語ったからです。

「川上糸子はまだ相州屋そうしゅうやに滞在していて、しかも一昨日から気分が悪いといって床とこに就いているそうです」

第四回

一

女優川上糸子が、伊豆山の相州屋に滞在中であると聞いた時、俊夫君と小田刑事とは、互いに顔を見合わせて、さすがにしばらく呆然たる有様でした。まことに無理もありません。川上糸子はゆうべたしかに春日町の空家に、たとえそれが仮死であるとしても、死骸として発見されたのであるのに、伊豆山の相州屋では、一昨日の晩から気分が悪いと言って、床に就いているというのであるから、もし伊豆山に果たして糸子が臥床がしやう中であるとすると、その糸子がにせ物であるか、あるいは春日町の空家で発見された糸子がにせ物で

なくてはなりません。

「どっちがにせ物だろうか」

と、小田刑事は俊夫君に向かつて尋ねました。

「むろん、いま相州屋に寝ているのがにせ物です」

と、俊夫君はきっぱり答えました。

「え？ どうして分かる？」

「死に顔や寝顔まで、にせ物はまねことができぬはずです。Pのおじさんは、春日町の空家にいた女の死に顔を見て、たしかに川上糸子だと判断なさったでしょう。だから、それが本当の川上糸子だったのです。」

それに、悪漢たちは、川上糸子が死んだということを、警察の人に見せたかったのです。そうして、さらにその死骸を隠して、わざと事件を紛糾させたかったのです」

「何のために？」

「さあ、それはよく分かりませんが、あるいは単に、彼ら誘拐団の威力を示して、警察をからかうつもりだったかもしれません」

「君のところへ電話をかけたか、糸子の死骸の上に君宛ての名刺を置いたりしたのも、や

はり君をからかうためだったろうか」

「無論そうでしょうが、僕はその点がまだはつきり理解できません。僕をからかうのが不利益であることぐらい、彼らも知っているはずです。だから、僕のところへ電話かけたり、僕宛ての名刺を置いたりしたのは、果たして彼ら誘拐団の本意であるかどうか疑わしいと思います。

……が、それはとにかく、これからすぐ熱海警察署へ電話をかけ、相州屋そうしゅうやの川上糸子を監視して逃がさぬよう告げてください。僕はこれから、兄さんと二人で伊豆山いずさんへ行き、その糸子のにせ物に会ってこようと思います」

この意外な言葉に、私はもちろん、小田さんもいささかびっくりしました。

「俊夫君、本当に伊豆山へ行くつもりか」

と、私は尋ねかえました。

「そうよ、兄さん。僕は久しぶりに旅行がしたくなかった。これからすぐ東京駅へ行こう。今夜は帰れないかもしれないから、うちへ電話をかけておいてくれ」

「こちらは、どういう手配をしたらいいだろうか」

と、小田さんは尋ねました。

「糸子のにせ物が相州屋にいる間は、誘拐団は逃げはしますまい」

「君、本当に、それは糸子のにせ物だろうか」

「にせ物でなくて、本物だったら何も心配するには及びません。先刻、近藤方での話によると、四五日前に川上糸子と同じ年輩の女優らしい女が、美容術を受けに来て、色々糸子のことを尋ねたということですから、伊豆山にいるのは、多分その女だろうと思います」

俊夫君は、皆さんもご承知のとおり、いったん言いだしたらけっしてあとへは引きません。また、俊夫君が伊豆山までわざわざ出かけるについては、何か目的があるに違いありません。で、私たちは、小田さんに別れをつけて東京駅に向かいました。

小田さんに別れるとき、俊夫君は、

「僕が伊豆山へ行くということを、熱海の警察へ話しておいてください」と言いました。

二

冬とはいえ、風がなく、空は麗らかに晴れ渡って、まるで春のような暖かい日でありま

した。けれども、汽車の窓から見る山野の色は、さすがに荒涼たるもので、ところどころに小家のように積んである新藁しんわらの姿は、遠山とおやまの雪とともにさびしい景色の一つであります。

久しぶりの旅行なので、俊夫君は窓の方を向いて、移りゆく風景を、珍しそうに眺めておりました。

大船駅を過ぎて、相模の海が見えるあたりは、東海道線のうちでも絶勝の一つに数えられます。源実朝は、

箱根路をわが越え来れば伊豆の海や

沖の小島に浪の寄る見ゆ

という名めいぎん吟を残しましたが、伊豆をとりかこむ海の風光は、相模の海にしろ駿河の海にしろ、常にえもいわれぬ美しさを呈しております。皆さんは、『太平記』の中の俊基としもと朝臣あそんの「東あずま下り」の条をお読みになったことがあります。

「竹の下道行きなやむ足柄山の峠より、大磯小磯見下ろせば、袖にも浪はこゆるぎの、急みやこちりぐともはなけれども……」とある。大磯あたりの海岸は、紫の浪が間断かんだんなく打ちよせて、都みやこちりの塵にまみれた頭脳あたまを洗濯するに役立ちます。

かれこれするうち私たちは国府津駅に着きました。富士山が白い衣をかついでるか彼方につつ立っておりません。私たちはその英姿をほめたたえながら、以前はここから小田原行の電車に乗り、小田原に着くとすぐ熱海行軽便鉄道に乗ったので、軽便鉄道はその形が至って古めかしく、まるでステファンソンがはじめて作った機関車のようだったが、今は立派な電気機関車が走っています。

その頃は時々断崖の上で、もしや転覆しはしないかとひやひやしたものです。とうとう私たちは目的地の伊豆山にまいりました。伊豆山の元の停留場に立つと、前には眼下はるかに海があり、後ろには鬱蒼たる樹木に覆われた山があります。相州屋へ行くには、ここから長い石段のある道を降りねばなりません。俊夫君は、前面のはや暮れ初めた海中に横たわる島を指して、

「あれは初島だよ」

と言いました。

海岸の白砂のないのは物足らぬけれど、このあたりから清澄な温泉が出ると思えば、それくらいのことはいくらでも我慢しなければなりません。その温泉宿のうちでも、東洋一の浴槽をもっているという点で名高いのが、これから行こうとする相州屋であります。私はいつの

間にか、事件のことを忘れてしまつて、あたりの風光や温泉のことなどに心を奪われておりました。

突然、一人の警官が私たちの方へ歩いてきたので、はッとして私は立ちどまりました。

「塚原俊夫君はあなたではありませんか」

と、警官は俊夫君に言いました。

「僕です」

と、俊夫君は答えました。よく見れば左手に相州屋の玄関があります。

「川上糸子は今朝ほどまではいたそうですが、いつの間にかいなくなりました」

これを聞いた俊夫君は、案外にもそれほど驚きはしませんでした。

「そうでしょう。たぶん僕はもういないと思ひました。それにもかかわらず僕がここへ来たのは、川上糸子のいた部屋を調べたいと思つたからです」

こう言つて俊夫君は警官に案内されて、相州屋の中へ入りました。

女中や番頭たちの話を総合すると、川上糸子は一昨々日の夕方、熱海まで散歩してくると言つて出かけ、その夜遅く帰つてその翌日すなわち一昨日から、気分が悪いと言つて床とこに就いたという話であります。今朝けさ、東京から電話のかかった時は、たしかにいたはずだ

が、その後いつの間にかなくなった、というのです。

「一昨々日の夕方までいたのが本物の川上糸子で、その夜遅く帰ったのが、にせ物だったんだ」

と、俊夫君は私に向かって言いました。

「今日東京から電話がかかったと聞いて、さては警察の手がまわったかもしれぬと思って逃げたのだろう。荷物を持って出ては怪しまれるから、きつと手ぶらで抜けだしたに違いない。」

僕はつまり、そこをねらったんだ。その荷物のうちからか、あるいは部屋の一隅から、誘拐団のありかを知るべき手掛かりを得ようと思つたんだ」

三

それから私たちは、川上糸子の滞在していた部屋に案内されました。部屋の中には荷物がそのまま置かれてありましたが、俊夫君が電灯の光でそれを検しらべると、大部分は本物の川上糸子の所有品でした。

俊夫君はスーツケースや、机などを熱心に調べましたが、ふと、鏡台の小さな引き出しから一枚の紙片を取りだしました。それは幅一寸長さ三寸ばかりの西洋紙で、その表面には記号のようなものが書かれてありました。

俊夫君の顔には、急に明るい表情がうかびました。そうして、無言で私にそれを示しました。その表面には、次の文字が書かれてありました。

So Bo Fa Pa, Ha Ka Aa Ci Ne Hu, Ha Fe V Bu Nu.

私はこれをローマ字式に読んでみましたが、さっぱり意味が分かりませんでした。ついできた警官も、物珍しそうに顔を近づけてそれを見ましたが、もとより分かるはずがありません。

「俊夫君、君にはもうこの暗号が読めたか」

と、私は尋ねました。

「いや、まだ分からん。しかし、多分、これを解けば、きっと重要な手掛かりが得られるだろう。さあ兄さん、これから温泉へつかって湯滝を浴びようじゃないか」

「え？　温泉につかる？」

と、私は驚いて聞きかえしました。

「にせ物の川上糸子が逃げた以上は、誘拐団も逃げてしまおうじゃないか」

「だって誘拐団のいどころが分からなくつちや、捕まえようがないではないか。温泉にかかるのは、この暗号を考えるためだよ。湯滝にでも打たれたら、きつと、いい考えが浮かぶと思うんだよ」

それから私たちは、東洋一の浴槽すなわち千人風呂に入りました。それから湯滝にからだ身を打たれました。俊夫君はうれしそうにはしゃいで、いっこう暗号を考えていそうもありませんでしたが、よく見ると、やはりその眼は血ばしって、心の奥で一生懸命に考えていることが分かりました。

やがて、俊夫君は一人で湯滝の壺に降りてゆき、その肩を打たせておりましたが、とつぜん大声で、

「兄さん、兄さん」

と呼びました。

「何だ？」

と私はかけよつてのぞきこみました。

「解けたよ。解けたよ。暗号が分かったよ」

と言いながら俊夫君は雀躍こおどりするのでありました。

第五回

一

俊夫君は湯滝の壺から走りあがってきて、急いで身体からだを拭ぬぐい、またたく間に洋服を着ました。そうして、ポケットから、さつき、川上糸子のいた部屋で発見した暗号の紙片を取りだして私に示しました。その時、私も、すでに俊夫君と同じく洋服を着ておりました。

So Bo Fa Pa, Ha Ka Aa Ci Ne Hu, Ha Fe V Bu Nu.

という訳のわからぬ文字が、その紙片に書かれております。

俊夫君はいくぶん興奮して言いました。

「兄さん、この暗号をちよつと見ると、ローマ字でないかと思うだろう。けれどもローマ字読みにしても、何のことか意味が分からない。しかし、これがやはりローマ字と同じようなもので、この大小二つずつの文字の組みあわせは、日本の仮名に匹敵すべきものだ」と

は容易に察しがつくだろう。

してみると、この大きな文字すなわち、S、B、F、P、H、K、A、C、N、V等、ア行か、カ行か、つまり、アカサタナハマヤラワンのどれかの行の子音を示し、小さい文字は普通の a i u e o の母音を示すに違いないと思われる。a i u e o の他にもうないところを見ると、それに決まっている。すると、今度は大きな文字がいかなる行の子音をあらわすかを定めなければならぬ。これがこの暗号を解く、最も難しい点なのだ。

一目見ただけではとうてい考えられない。そこで僕は湯滝に打たれようと考えたんだ。よく物を考えるときに、頭を拳でたたく人がある。あれはたしかによい方法だ。で、僕も、湯滝に脳天を打たせたのだよ。

すると、兄さん、僕はふと湯滝が水でできていることを考え、水はこれを化学の分子式で書くと、 H_2O だ。と思った時、はッとしたよ。そうして、この大きい字を頭の中で繰りかえしてみたところ、SもBもFもその他の大文字はみな化学の原素の記号ではないか。すなわちSは硫黄、Bは硼素^{ほうそ}、Fは弗素^{ふつそ}、Pは燐^{りん}、Hは水素、Kは加里^{カリ}、Aはアルゴン、Cは炭素、Nは窒素、Vはバナジウムだ。

兄さん！ もうこれでしめたものだ。ちよつと鉛筆を出してくれ。原素の記号のうち、

花文字一個できているのは、A、B、C、F、H、I、N、O、P、K、S、W、U、Vだ。

そこで、次にどれがア行に属し、どれがカ行に属するかという問題が起こるが、これはもう訳のないことだ。きつと、原子量のいちばん少ないものから順に取ってあるに違いはない。すると、その順序は、そうだね、ちよつと書いてみねば分からない」

こう言いながら、俊夫君はこれらの原素の原子量を書きました。どうも実に俊夫君の記憶のよいにはいまさら驚かされます。

「これで、小さいものから順にならべると、H、B、C、N、O、F、P、S、K、A、V、I、W、Uだ、で、

H	………	ア行	B	………	カ行	C	………	サ行	N	………	タ行	O	………
………	ナ行	F	………	ハ行	P	………	マ行	S	………	ヤ行	K	………	ラ行
A	………	ワ行	V	………	ン								

であるに違いない。してみると、

Haはア、Hiはイ、Huはウ、Heはエ、Hoはオ。Baはカ、Biはキ、Buはク、Beはケ、Boはコ。

となるわけだ、いいかね。そこでこの暗号を検査すると、

Soはト、 Boはロ、 Faはハ、 Paはフ、 Haはア、 Kaはリ、 Aaは
 ワ、 Ciはシ、 Neはテ、 Huはウ、 Haはア、 Feはク、 Vはン、
 Buはク、 Nuはツ。

となる。すなわち、これを書きなおすと、『ヨコハマ、アラワシテウ、アヘンクツ』だ。
 『横浜、あらわしちよう荒鷺町、阿片窟』だ……」

言い終わって俊夫君は勝ち誇った笑いを浮かべました。私はすっかり度胆を抜かれて、
 しばらく物が言えませんでした。やがて、

「おお、それでは、誘拐団は、横浜の荒鷺町の阿片窟を根城としているのだね？」
 と、尋ねました。

「そうだよ。これで僕の見込みどおりになったわけだ。伊豆山いずさんへ来たおかげで、悪漢たち
 の本城をつきとめることができたのだ。

この上はもう彼らを逮捕すればよい。兄さん、これからすぐ警視庁へ電話をかけて、P
 のおじさん呼びだしてくれないか」

二

さて、読者諸君、これから当然、悪漢たちの逮捕の場面を述べなければならぬのですが、残念ながら、私自身その場に居合わせなかつたので、その詳しい顛末を紹介することができません。で、私は、逮捕に行かれた小田さんが、俊夫君に物語られた話を、お取り次ぎするにとどめます。

「……伊豆山から君の電話がかかるなり、すぐ数人の腕利きの刑事をつれて逮捕に向かったよ。まず横浜の警察署へ行つて事情を話すと、幾人でも応援隊を出すとのこと。それに大いに力を得て、闇夜あんやに乗じて阿片窟包围に出かけたんだ。

この荒鷲町あらかしちやうというのは、支那人街の一部でずいぶん殺伐なところなんだ。かねて警察でも目をつけていたんだが、命知らずの連中の寄り合い場所だから、かの蜂の巣をつついて怪我をするようなことになつてもよくないからと、いわば見て見ぬふりをしていたんだ。

けれども今度という今度は事情が事情だから猶予することができない。そこで横浜警察署でも、いわば乾坤けんこん一擲いつてきの大勝負をするつもりで取りかかったんだ。

荒鷺町へ行くなり、先方もさるもの、すわ警察の手入れだと、阿片窟の連中は、抜け穴から逃れようとしたのだが、そこはかねて警察の方でじゅうぶん研究してあったので、抜け穴の出口で一人一人いわば網に引っかけてしまったのさ。

むろん例の誘拐団の連中もその中にいたのだが、さて沢山の支那人や日本人の男女のうちどれが誘拐団の連中だやら分ならず、警察へ引きあげてから、その取り調べに困ったが、幸いにも、君に遺恨を持つているあの山本信義がいることを警官の一人が発見したので、信義をせめることによつて、とうとう、誘拐団の連中を明らかにすることができたのだ。

今回彼らが逮捕されるようなことになったのも、まったく、山本信義のためだったので、誘拐団の連中は大いに彼を恨んでいたよ。

どういう訳かという、そもそも、頭蓋骨をマークとする上海^{シャンハイ}の誘拐団が、今度東京へ来たのは、女優の川上糸子を上海へ誘拐していつて彼女を映画のスターとして、一本のフィルムを製作するつもりだったのだ。そのフィルムというのは非常に高価で売れるものなのだ。

正式に川上糸子に交渉したとて承諾するわけがないので、無理な手段をもって連れ去ろうとしたのだ。もちろん、用事さえ済めば糸子を返してよこすつもりだったのだ。

ところで、誘拐団の連中は、ひそかに東京へ来てから、糸子をどうして連れだそうかと色々事情をさぐると、山本信義が糸子の首飾りを盗んで君に発見され、それがために職を失い、爾来、糸子にも、うらみをいだいていることが分かったのだ。

この山本という男は名前は信義だが、いたって不思議な男であるばかりか、よく検べる
と窃盗犯の前科のあるものなのだ。山本信義というのも実は偽名なのだ。で、誘拐団の連中は山本を仲間にするれば、糸子を誘拐するに非常に都合だと思い、山本のありかを発見して、そのことを話すと、山本は一も二もなく悪人たちの仲間入りをしたのだ。

さて、それから、糸子を誘拐する方法を色々研究していると、糸子が伊豆山温泉へ出かけたので、この機を逸すべからずと、誘拐の計画を定めたのだ。

その計画はどういうのかというに、まず糸子を誘拐するためには糸子の替え玉をつくらねばならない。幸いに一味のものの中には女もいるから、それを替え玉にしようとして、糸子のよく行く春日町の美容院へ研究に行かせたのだ。そのとき山本はその女の案内をしたのだが、むろん中へは入らず、あたりをうろついて、待っていたのだ。

さて、その女が、糸子の風姿やその他のことを近藤方で研究してくると、いよいよ、糸子に仕立てて伊豆の国に行かせ、糸子が熱海へ散歩に出たときを選んで、海岸で捕らえて、

すぐさま船の中へうつし、その船の中で、無理にゲルセミウムを注射して仮死に陥れたのだ。そうして、糸子の替え玉が相州屋そうしゅうやへ帰り、その翌日から気分が悪いといって、そのまま床とこについたのだ。つまり替え玉を発見されない手段だったのだ。

さて、一方、仮死に陥った糸子を悪漢たちはそのまま連れ帰ればよかったのであるが、彼らには妙な迷信があつて、一旦その仮死の身体からだを警察の目に触れさせれば、途中で逮捕されることなく目的を達することができると信じているので、仮死体を春日町の空家へ持つてきて、僕たちに見せる計画をしたのだ。

そのため、君が事件に加わつてきて、とうとう彼らの計画は微塵みじんに砕かれてしまったのだ。

誘拐団は糸子の替え玉が帰りしだい出発しようとしたのだが、ちようど、いざ出かけようとするとき警察の手が入ったのだ。

川上糸子は、あのままずっと仮死の状態になつていたよ。彼らは、彼女の身体からだを手頃なトランクの中へ入れて、東京まで運んだりまた持ちかえつたりしたのだが、化学の記号を暗号に使つたり、ゲルセミウムを使用したりするくせに迷信的なことをやるというのは、実に犯罪者というものの特徴を示していると思うよ。

それはとにかく、君のおかげで、川上糸子が無事に帰り、誘拐団が逮捕せられたことは、実に喜ばしいことと思う……」

皆さん、これで、この事件は解決されました。このことは、新聞にも出ないですみましたから、川上糸子がそういう恐ろしい目にあつたことを、世間一般の人はちよつとも知らないのです。ただこの事件で、俊夫君にもはつきり分からなかつたのは、なぜ、彼らが糸子の仮死体を警察に見せにきたか、

「まさか迷信のためとは気がつかなかつた」

と俊夫君も笑って申しました。

青空文庫情報

底本：「小酒井不木探偵小説選 〔論創ミステリ叢書8〕」論創社

2004（平成16）年7月25日初版第1刷発行

初出：「子供の科学 六巻一〜五号」

1928（昭和3）年1〜5月号

入力：川山隆

校正：小林繁雄

2005年11月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

深夜の電話

小酒井不木

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>